

山本有三 翻訳ものの世界

会期 2019年9月7日(土)〜2020年3月8日(日)



近代における翻訳の意味

明治維新によって日本が急速な近代化を迎え、西洋の文明を吸収することで近代国家としての体裁を整えていく過程にあつて、翻訳は、「西欧最新の学識と知識を移入」*1するために欠くことのできないものでした。それは文学においても同様であり、明治20年代以降、翻訳文学は坪内逍遙、森田思軒、森鷗外といった作家達によって隆盛を迎え、日本近代文学の確立に寄与していくこととなりました。

近現代における翻訳文学について井上健は、「同時代の日本文学に、それまで供給されなかった主題や素材をふんだんに提供するとともに、日本文学いや日本にはいまだ根付いていない新しい感性や、新たなものの見方を導入し、新ジャンルや新概念を創出する、有効な触媒として機能していった」と述べています。*2 実際、海の内から新しい文学を迎えたこの時代、作家を志す若者が翻訳を手掛けることで、原作から文体や表現など多くの要素を吸収し、作風を確立する契機となすことは珍しくありませんでした。明治20年生まれの山本有三「1887-1974」もまた、文壇で名を成す以前、翻訳から多くを学び取った一人です。

有三は、学生時代に鷗外の翻訳ものに親しみ、自分でも明治43(1910)年の夏にアイルランド文学者シングルの戯曲を二、三作、大正3(1914)年にハウプトマン

「日の出前」、ゾーダーマン「名誉」、大正4年の卒業論文にはハウプトマン「織匠」と、様々な翻訳を手掛けています。中でも、大正5年に上梓したストリンドベリ『死の舞踏』は、有三が作家としての飛躍を期して臨んだ翻訳でした。

翻訳による精進

帝国大学を卒業した後、有三は、新派三角同盟一座の座付き作者*3となったものの、海千山千の役者に対し、教育を受けたという自負がまるで役に立たぬ現実に直面したことから、翌年には職を辞しています。精進を決意し創作から距離をとり、読書と翻訳に励む時期を送りました。『死の舞踏』は、この時期に手掛けられた翻訳作品です。憎しみあいなながらも別れられず25年間を過ごした夫婦、アリセとエドガル、そして友人かつアリセの従兄弟であるクルトの三者の愛憎が描かれています。

有三はストリンドベリから精緻な心理描写や作劇術の土台を学び取るとともに、その思想から自身の作風確立につながるエッセンスを吸収しています。たとえば「死の舞踏について」という文章のなかで、「忍従の人信仰の人クルトと意慾の人反抗の人エドガルとの対立」に、「ストリンドベリの「あらゆる反抗的精神と忍従的精神」の交錯を見出し、高く評価しています。ここに

は、有三の初期作品の特徴として表れる「自然的事実としての、生存の闘争」と「道徳的善」の葛藤*4に非常に近いものを見て取る事ができます。

精進の時期を経て発表された戯曲「生命の冠」や「嬰兒殺し」(大正9年)によって、有三は、社会における人間の苦悩を描く戯曲の名手として高く評価されていきます。その根底を築いたものこそ『死の舞踏』の翻訳であつたと言えるのではないのでしょうか。

昭和に入り、劇作から小説へと活躍の場を移した後、有三は折に触れて翻訳を手掛けています。「永遠の兄の目」(昭和2年)や「盲目の弟」(昭和4年)といった作品からは、すでに作風を確立した有三が、翻訳を通し向日性に代表される「有三らしさ」をいかになく注ぎ込んでいることが見て取れます。その最も顕著な一例が、昭和10(1935)年に発表された「心に太陽を持って」でしょう。今では有三の代名詞とも言うべきこの詩は、ドイツ詩人、フライシュレンの詩を翻訳したものです。直訳すれば「心に太陽を持って、さうすれば、なにごとにもよくなる」と言うべき部分を、「さうすりや何だつてふつ飛んでしまふ」と、より意志的な言葉で大胆に意訳することで、原作の味わいを取り込みつつ、有三ならではの作風に換骨脱胎しています。

有三が築き上げた独自の「翻訳もの」の世界を、ぜひお楽しみください。

(文芸企画員・学芸員 三浦穂高)

*1: 井上健「序にかえて―翻訳文学への視界―」

(『近現代日本文化の変容と翻訳 翻訳文学の視界』 思文閣社 平成24年1月)

*2: 1と同一

*3: 芝居の一座や劇場に専属して脚本を書き下ろす作者のこと。

*4: 唐木順三「山本有三論」

(『現代日本文学序説』 春陽堂 昭和7年10月)

山本有三の外国文学の受容

―その「年譜」をたどりつつ―

早川正信

標題に沿った一文を書くにあたって、まず作家、山本有三(以下有三と略)の「年譜」をたどることから始めたい。

まず明治四十二年七月、有三は迂曲の道をたどったのち、ようやく宿願の第一高等学校文科に入学を果す。この入学は篤学な若者にとって晴々とした知的沃野に到達したことを意味していた。

当時の高等学校の教育の共通して目指していた要件のひとつは、とくに西欧の主要言語を読み込み、合せてその文化を同時に理解するという骨太なものであった。しかし、その翌年、ドイツ語の教師の「非常識」(有三の弁?)な採点により十数人の落第の中に入り、しかし新学年の九月から芥川龍之介、菊池寛、久米正雄らと机を並べることになる。とくに大正三年には有三は一年先輩にあたる山宮允と諮って第三次「新思潮」を立ち上げていることは周知のとおりである。この文芸誌のもとに集った仲間達は将来文芸に向うとは限られていなかっただものの切磋琢磨、競い合って、とく

に当時移入されていた外国文学を読み合った姿が、その「編輯後記」のなかに生き生きと描かれている。またそれぞれの同人が自分の得意とする作家がいて「芥川のシング(アイランドの作家)、菊池のグレゴリー(同前)、山本のストリンドベリイ(北欧)」などの一文も見られる。

しかし大正四年大学の卒業とともにこうした外国文学への研鑽は一時勢を失ったかのように思われる。それは卒業と同時に喜多村一座の座付作者となり、それなりの成功をおさめたようだが、「幕内生活の非」を悟り、職を辞している。「年譜」はこのあたりの心境を「深く自身の無力を感じ精進の気を高める」と書き、以後足かけ三年にわたる、いわゆる「雌伏期」に入っていく。同時に以前から味読していたストリンドベリイの長篇戯曲『死の舞踏』の翻訳を開始し七月に完成している。こうした「雌伏期」こそその後の有三の文芸の道筋を決定する期間であり、それはまた「新思潮」時代への回帰でもあった。一方、『死の舞踏』の翻訳後

まもなく有三は『死の舞踏』について」という表題の論文を書き①作品の評価②内容と戯曲としての深さ③自らに裨益した点について約二万語を費やしている。とくに③について有三の関心は戯曲の主人公エドガルに向けられていない。むしろ有三の関心は作品のなかにあつて脇役であるクルトという人物に向けられている。彼は権柄ずくのエドガル大尉とその妻の奸計によって不幸の底に落されたが「忍従」に徹し「あきらめ」に徹することによって安舒な境地に達した人物に重きをおくのである。従つてこの「あきらめ」は希望の欠けた絶望ではなく希望を前途にみる向日的なものとして、に気づくべきなのであろう。こうした「あきらめ」の考え方は、雌伏期を脱した第二作目の戯曲『生命の冠』(大正9・1)のなかで破算を蒙った兄弟たちの確かな寄り場として援用されていくのである。

また「年譜」大正九年のなかに雑誌「人間」に「芸術は『あらわれ』なり」を書き芸術というものの認識の一端を表明している。これと同時にオーストリアの作家A・シュニツラー(一八六二―一九三二)の作品の翻訳が行われていることも見のがせない。このウィーン生れでウィーン育ちの作家の令名はすでに第三次「新思潮」の同人達の間で読まれていたことは確実のようだが、同誌の「編輯後記」や「雑記」のなかではその名は見られ

ないようである。しかし芥川はすでにこの作家の作品「小間使いと若様」などのアイロニーに満ちた作品を熟知していたし、加えて『輪舞』について「などの小文が見られることからすれば同人の間でも話題となっていたのであつたらう。有三の専攻がドイツ語であつたことからすればなおさら深く読み進めていたであつたらう。しかし芥川のこの作家に対する興味はもっぱらその洒脱さ、諷刺性などにあつたのにくらば有三の関心はしつとりとした筆致にかかるその「情愛」にあつた。そのため彼の翻訳意欲をそそつたのは「兄弟の情愛」を描いた『盲目のジェロニモとその兄』（一九三二）である。この物語りの粗筋を簡単に紹介すると、

幼い日、兄カルローと弟ジェロニモが庭で遊んでいた時、兄は誤つて弟の目を吹矢で射るといふ事件が起きる。弟は治療のかいもなく両眼ともに闇の底に沈んでしまう。兄は苛責の念に苛いながらもなかなか弟に歌わせ自分はギターをかかえながら袖乞いの生活を続けている。盲目の弟はある時兄に猜疑心をいだくが、兄は何とかこれを解こうとして苦悶する。「兄と弟」「不可視と可視」「光と闇」といった対立的要素がついに和解に至るまで相拮抗して描出されてゆくのである。しかし物語はこうした相対立するいくつかの力がつき突けた所で幕を閉じることになる。有三自身もこうした対立的要因が作品の奥行きを作っていくことに気づいていくのである。この作品の翻訳を終えた有三が次

のように言及していることが注目される。「一体、兄と弟とか（中略）永遠と瞬間、柔または剛といったように、人生において重要な現象であり契機である」と述べている。ちょうどこの時期有三は「人間らしさ」を描き出すにはどうするかと思案していたこともあつてこの珠玉と言われたこの作品の翻訳に触発されて、ようやく結実に向つていく心の相が感じられる。このちょうど期を同じくして「錯覚」（大正12・8）、「一人一回限り」（大正12・3）などを書き、芸術における二律背反的現象に関心を持ち、やがて大正十四年に結実を見る自らの確固とした文芸観、人生態度である「坐り」に至る道筋を読みとることが可能である。

独楽が非常によく廻つて動かないように見える時、わたしたちはそれを「独楽が坐る」といった。（中略）しかし「坐る」ということは動かないことではない。一見動かないように見えるけれども、実は最も早く廻転すればこそ独楽ははじめて「坐る」のであつて、「坐り」は活動の絶頂である。（中略）動きが見えるということは、力が弱い証拠である。

（中略）

独楽が坐ることを子供達は「澄む」、ともいつている。

また、この「坐り」の一文を補う形でこの年の八月「途上」を書き（都新聞）「独楽は既に投げられた時にその運命が決つている。（中略）よしや事実

は倒れる途上にあるとしても、私は坐りを念として進みたい。」と述べている。さらに、こうした観念の形成について安定の自信を持たせたのは、S・ツヴァイク（一八八一—一九四二）の作品との出会いも重要な意味を持つていよう。昭和二年有三はやはりウィーン生まれのこの作家の「永遠の兄の目」の翻訳を発表している。しかし、その訳文の文中に次のような一文がある。正義のために獄中に降りた猛将ヴァイラータの暗黒の中で体験する「自己観照」の場面がある。「彼が離れぬに体験したことは、今や流れて一となり、（略）かの清浄なる像は波のうねりもなき清澄明徹」の姿をとるといふ一文に共感を示している。

以上、「年譜」をたどりながら、有三が外国文学、とくにストリンドベリイ、シュニツラーによって示唆され自らの「人間を描きたい」と切望した有三にどのような文芸的、人生態度を形成させたかについて概観してこの拙文を閉じたい。

早川 正信（はやかわ まさのぶ）
一九三九年生まれ。山形大学名誉教授。
専門は英文学、比較文学。
著書『山本有三の世界 比較文学的研究』（一九八七年 和泉書院）、論文「山本有三と外国文学」（二〇〇八年「解釈と鑑賞」）などがある。

新資料紹介 ～山本有三着用の外套～

三鷹市は、2019年4月、山本有三の遺族から有三が着用していた外套の寄贈を受けました。表地はウール、裏地は絹と、上質な布地で仕立てられています。また裏地には、イニシャルの「YY」の刺繍が施されています。袖のかわりにケープ状のマントが前面を覆っているこのような形的外套は、インバネス、二重廻し、とんび等と呼ばれています。もともとはイギリスのインバネス地方が発祥の外套でしたが、明治期に日本に伝わると、大きな袖でも邪魔にならないデザインであることから、和装時に羽織る外套として重宝されました。

和装姿の写真が数多く残っている有三ですが、こうした外套を羽織っている姿はほとんど残されておらず、大変珍しい資料です。「いいものを少し」という座右の銘どおり、派手さはないものの、一目で質の良さがうかがえるこの外套、有三が羽織れば、さぞや大家らしい姿となったことでしょう。



事業報告 ～春の朗読コンサート～ 5月開催

毎年、好評をいただいている春の朗読コンサートも、今年で第10回を数えることとなりました。今回は、朗読家・野田香苗さんとクラリネット奏者・人見剛さんをお招きし、有三の随筆「酒中日記」を見て」と、戯曲「女中の病気」を朗読していただきました。

朗読のメインとなった「女中の病気」は、昭和初期の家庭を舞台として、弱い立場である「女中」に焦点を当てた作品です。人見さんには、作品の雰囲気に合わせて曲を書き下ろしていただきました。情感のこもった野田さんの朗読に、人見さん作曲のあたたかな劇中曲が寄り添い、コンサートに訪れた皆様からは、「朗読の力とクラリネットの音色に惹きつけられた」、「映像が見えるようだった」など様々な感想が寄せられました。



第6回 三鷹市山本有三記念館スケッチコンテスト

来場者による投票と、審査員の推薦に基づいて決定する受賞作品を、コンテスト終了後、山本有三記念館にて展示いたします。あなたの絵で、記念館を飾ってみませんか？
有三記念公園は入場無料ですので、お気軽にスケッチにお越しください！

募集期間：2019年10月1日(火)～12月8日(日)

コンテスト：2020年1月18日(土)～26日(日) *20日(月)は休館

コンテスト会場：三鷹市公会堂さんさん館

受賞作品展示：2020年2月4日(火)～3月8日(日)

受賞作品展示会場：三鷹市山本有三記念館

*スケッチコンテスト詳細や休館日につきましては、当記念館までお問合せいただくか、ホームページをご覧ください。



<ガイドボランティア>

土・日・祝日の午後1時～4時に解説を行っています。事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。団体利用は2週間前までに要申込(平日の解説も可)

編集・発行

三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀2-12-27

TEL 0422-42-6233

ホームページ

<http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日及び年末年始(12月29日～1月4日) *月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館

入館料：300円(20名以上の団体200円) *受付にて「年間パスポート(1,000円)」を販売しております。

*中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、
「東京・ミュージアムぐるっとパス」利用者は無料

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分

JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分